

心を動かし、文化を育む、 素材としての土には可能性がある

早稲田大学理工学術院
准教授 山田 宮土理氏に聞く

そこに暮らす人々の営み、地域の歴史と文化を土は反映してきた。調湿性や不燃性といった機能性だけではなく、建材としての土の魅力とその価値、これからの建築へ活かしていくために何が鍵になるのか。早稲田大学の山田宮土理准教授に話を伺い、土壁の未来を展望する。(編集部)

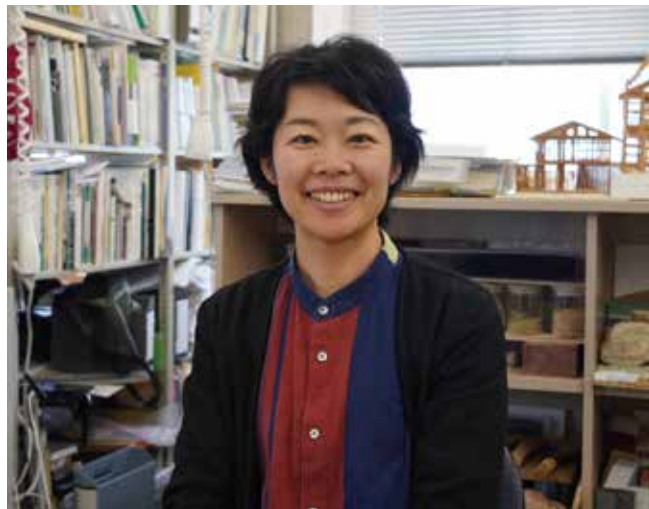
土の本質は心を動かすことができること

土の魅力とは何でしょう――

土は建材として不燃性や調湿性、蓄熱性といった機能をもつことも重要ですが、乾燥固化で固まるために水に戻せば土に還るという資源循環性があり、これは近年の循環型社会への移行と共鳴する重要な魅力だと思います。そして何より、土の魅力の本質は、人の心を動かし地域の文化を育むことができることだと感じています。

法隆寺の小舞壁に見られるように、奈良時代にはすでに荒壁から中塗りという土壁の基本構成が完成していたと土壁の歴史研究家である山田幸一先生が記しています。はるか昔から現在に至るまでの時の流れの中で、日本の土壁というものは繰り返し学びながら独自に技術を発展させてきました。その技は、近隣で入手できる自然素材を地球の恵みとして大切に生かし、使いこなすものです。土だけでは構成できないところは藁や竹、木材に委ね、バランスの取れたある程度の強さや硬さをもつ壁にします。そして人の目に触れる表層を如何に美しく仕上げるかに創造力を発揮してきました。その土地で採れた材料を使うために各地に個性豊かな建築があり、仕上げに創造力を発揮した人たちの工夫の積み重ねが地域の文化として根付いていました。

地域にあるものを人が工夫して使う、こうした建築の作り方には、創造力と修業が必要であり、技を極めた職人の



▲「建築のサーキュラーエコノミーを考えるうえで、土は自然へ帰っていく最適な材料です」と語る山田准教授

所作と仕上がった壁は美しく心動かされるものです。土壁が心を動かし文化を育むのは、技が決して自然を制御しようとするのではなく、共生しようとする考えに基づいているからだと思います。

近代化の流れや度重なる震災によって、現在では建築の作り方が変化しています。それでも日本の左官や土壁が注目される存在であるのは人の感性に訴える魅力があるからではないでしょうか。

循環型社会への貢献

社会の仕組みに自然素材を生かす難しさがある――

建築分野では如何にして循環型社会へ移行するかが、一昔前よりも共通認識になってきました。循環型を実現するには、建材の選択が非常に重要になりますが、土のもつ循環性はこれからの社会の要請に合致する素材ではないかと考えています。一方で、土は地域によって性質が異なり、調合も画一的には決め難いなど様々な難しさを持っています。